



治験(臨床試験)は、看護職にとって近くて遠い存在である。

開発に際してすべての薬剤は、ヒトを対象とした治験を必要とするが、抗がん剤は第Ⅰ相試験から患者を対象として実施される。その理由は、健常者に実施するには抗がん剤の毒性(副作用)が強く危険性が高いからである。さらにがん患者への第Ⅰ相試験では、副作用や至適用量等の設定のために行なわれることが多く、効果が得られるのは、参加者のわずか5%以下である。

恥ずかしながら私は、数年前までこの事実を知らなかった。もはや標準的な治療法がなく、藁にもすがりたい思いの進行がん患者にとって、抗がん剤第Ⅰ相試験への参加はこれらの事実を詳細に知らされた上での苦渋の決断なのである。がん患者のおかれているこの

ナースによる、ナースのための臨床試験入門書

【評者】

井上智子

東京医科歯科大学大学院保健衛生学研究所
教授

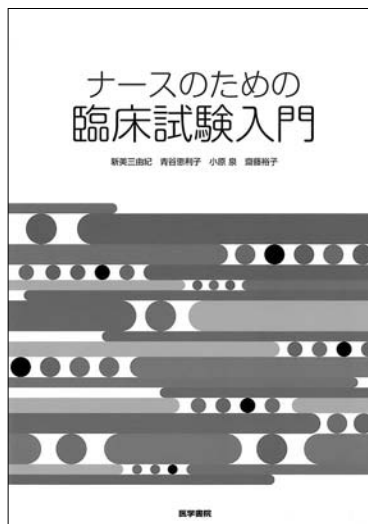
ナースのための臨床試験入門

新美三由紀・青谷恵利子・小原 泉・
齋藤裕子／著

B5版・196頁・2010年発行

定価 3,150 円(定価 3,000 円+税 5%)

医学書院(TEL: 03-3817-5657)



過酷な状況について、問題意識と看護の関わりとの必要性とを篤く説いたのが、執筆者の1人であり最近まで私の研究室の一員であった小原さんである。小原さんはこの課題で博士論文を仕上げ、『On-cology Nursing Forum』(vol.37, No.2, 2010)に掲載となったが、間もなくして本書の書評を依頼された。聞けば志を同じくするよき仲間たちと5年前から取り組んでいたとのこと、しかも執筆者は全員ナースと聞いて、発行がとても待ち遠しかった。

中身は期待通りであり、期待以上である。期待通りというのは、いまさら聞けない治験の基礎知識に加え、第6章「臨床試験における看護師の役割」では、被験者スクリーニングとインフォームド・コンセントにおける看護師の役割、さらに試験中の患者アセスメントや、併用が禁止されている薬剤・治療、推奨される支持療法などが記されている。さらに試験中止・終了時や家族への対応、コミュニケーションの取り方まで、とかく臨床看護師は手出ししてはいけない、できないと思い込みがちで、治験を受ける患者との関わりが具体的に記載されている。まさにナースによる、ナースのための臨床試験の入門書として面目躍如である。

期待以上というのは、本書が臨床試験のみならず、患者を対象とした臨床研究や疫学研究について、コンパクトでありながら基本に立ち返った実にわかりやすい記載がなされていることである。これは研究を手がける看護師すべてにとって勉強になり、かつ実用書として役立つ書物ともなっている。しかし、考えてみれば研究の基本を踏まえなければ、臨床試験の理解も進まないわけであり、実に理にかなった構成となっていることに気づいた次第である。

情報化時代の今日、がん患者・家族のほうで、医療職者より新薬や最新治療に関する情報を多くもっていることも珍しくない。専門領域に専心した看護の先達が培ってきた知識や情報、ケアのノウハウは、この領域に誇りをもつナースからの思いのこもったメッセージの書でもある。臨床試験を受ける患者の看護をより近くに、そして身についたものとするために、本書は手にする価値のある1冊である。